

「銀のロバ」が 見てきたもの…

萩京子／作曲

ロバとはどういう動物なのか？ ロバはこれまでも数々の物語に登場してきた動物だが、蔑まれる存在として扱われることが多い。「夏の夜の夢」や「ピノッキオ」でもそうだ。ロバに変身させられることは人として堪え難いこととして表わされている。ロバはなぜそんなに嫌われ蔑まれなくてはならなかったのだろうか？ 人間に使われ、ただもくもくと働くロバ。生まれ変わったとしてもロバにだけはなりたくない、と多くの人々は思うのだろうか？

だが「銀のロバ」では、ロバはまったく違うイメージで登場する。おだやかで、争いを好まず、静かにやはりもくもくと働くが、受動的にただ働かされるばかりではなく、時として意志を持ち行動し、人を助けるロバ。忌み嫌われる存在ではなく、暖かな日なたの匂いを放ち、「平和」と「祈り」を象徴しているように思える。

戦場から逃げ出してきたシェパード・チューイがロバにまつわる物語を子どもたちに語り聞かせる。その状況設定がこの作品の魅力であり、とても重要な要素だと感じている。

ロバにまつわる物語は横糸であって、縦糸はマルセル、ココの姉妹、そして兄パスカールがシェパード・チューイと出会い、彼を海の向こうの故郷へ帰り手助けをする物語である。チューイさんが語る物語を一種の劇中劇のように兄妹たちに演じさせたらオペラとして斬新でおもしろいのではないかと？ 宮澤賢治の作品で実践してきた「物語るオペラ」のスタイルを生かし、入れ子細工のようにいくつもの物語を内側に含んだオペラになるだろう。

マルセルたちにとって森の中で出会ったチューイさんは日常の外側からやって来た人だ。そして「海の向こうの自分の家」に帰りたいと言う。どこからかやって来て、また別のどこかへ去って行く。その人物が語ってくれた物語は子どもたちの心に残って行く。これは物語

が伝わって行くひとつの姿だ。ここから「物語は旅をする」というオペラ「銀のロバ」のテーマが導き出された。チューイさんは「ねこのくにのおきゃくさま」のたびびと兄妹と同じく、やって来ては去って行くマレビト（客）とも言える。チューイさんは銀のロバを手にしたことで自分でも気づかぬうちに物語を伝えて行く役目を担ったのではないかと？ 銀のロバを手にした人は物語を伝えて行く人となるのではないかと？ 銀のロバというキーワードはそのことを意味しているのでは？

この作品には「戦争」「労働」「家族」…などいくつかの主題が隠されているので、何に注目するかによって、物語がいろいろに見えてくる。私は劇中何度もくり返される「海のむこう」というキーワードに特に心ひかれた。「海のむこう」の故郷、わが家へ帰りたいというチューイさんの思い、「海のむこう」への興味やあこがれに胸をふくらます子どもたちの思いなど、さまざまな思いがつらなり波立っていくイメージが音楽的なテーマとなった。

さて、子どもたちの日常の生き生きした会話を歌で表現することは作曲家としてのひとつの大きな挑戦だった。会話を歌で表現することはオペラの基本だが、現代人、しかも子ども、となるとなかなか大変なのである。いずみ深さんの台本を得て、苦闘が始まった。だが好奇心や不安や希望、子どもたちがぶつかり合いながらめまぐるしく変化していく感情を音で紡ぐ作業は、最後には楽しくなっていた。子どもたちの日常、シェパード・チューイが抱える現実と彼が語るロバにまつわる物語、この3つの世界がそれぞれの質感をもって絡み合い進んでいくオペラである。苦闘の成果として「ママにばれちゃったの」とか「お姉ちゃんのせいだ！」というようなことばが歌われる新しさを楽しんでいただけたらうれしい。

はぎ・きょうこ（作曲家・ピアニスト）

東京都出身。1978年、東京芸術大学作曲科卒業。1979年よりオペラシアターこんにゃく座の座付作曲家兼ピアニストとして活躍。1997年より音楽監督、2004年より代表に就任。こんにゃく座で初演されたオペラは、「金色夜叉」、「ピノッキオ」、宮澤賢治作品など数多く、こんにゃく座外でも、劇音楽、合唱曲などを多数手がける。2013年2月に初演した「アルレッキーノ」―二人の主人を一度に持つと一は、来年2014年12月に再演が決定。